

巻頭言「言葉に取り組む」

宇野 元

時折私は、ドイツの著述家パウル・コンラート・クルツ(1927-2005)の言葉を思います。「文学がなかったら、言葉はどうなるだろう。私たちの意識は、浅いもの、繋がれたもの、画一的なものにとどまるだろう。」それから、ノルベルト・グシュトラインというオーストリアの現代作家が言っていることを思い浮かべます。いま手元にその正確な言葉が見つからないのですが、自身の願いをこのように述べています。「言葉が表現できる範囲をわずか数ミリでも押しひろげたい」。文学者の気概を感じさせられます。その志しを実行するために、どんなにか地道な取り組みが粘り強くつづけられていることでしょう。

ある説教者が語っています。――私たちの教会は、社会的領域への積極的な意識が不足しているわけではない。ディアコニアは軽視されていない。むしろ一所懸命、取り組んでいる。他方、現代の傾向である言葉の軽視が教会にも存在し、それに知らず知らずのうちに蝕まれていないだろうか。すなわち、教会の言葉である神学が過小評価されていないだろうか。また同時に、神学自身が力を発揮しなくなっていないだろうか。そしてこのことは、私たちがイエスのメッセージの中心に専心していないことと結ばれていないだろうか。今日の私たちキリスト者は、マルタにたいしてイエスが言われたことを、もういちど虚心に聞かなければならない地点にいるのかもしれない……。イエスはご自分の言葉に集中していたマリアをほめられた。私たちがマリアのようによい方を選ぶことが必要だ。しかも、そうすることは、聞くことと行うことの二者択一を意味しない。私たちは御言葉に専心することで確かな方向づけを得るのだから。

そして、聞くことと行うことの切り離せない関係をおなじくイエスの言葉から示しています。「わたしのもとに来て、わたしの言葉を聞き、それを行う人が皆、どんな人に似ているかを示そう。それは、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てた人に似ている」(ルカ6, 47+48)。

地面を深く掘り下げる。これは御言葉の傾聴と重なるでしょう。そのようにして確かな土台の上に建てられる「家」は、礼拝と宣教の委託にふさわしく応えるものになるでしょう。